

お茶女大家政

保坂久美子

〈目的〉 産業化、工業化の進展に伴い、一般に「若さ」と「生産性」、「効率性」が重視される傾向にあり、生産能力の乏しくなった老人の地位は低下していったと言われている。このような社会の中で、現代の若者はどのように老人を捉え、どのような老人観を持っているのであろうか。本研究においては大学生を取り上げ、彼らが抱えている老人のイメージと老人観を明らかにすることを目的とする。

〈対象〉 東京・静岡などの大学に在籍する大学生に調査票1,000票を配票し、自記式調査を行った。分析対象となったのは回収された票から無効票を除く794票である。対象者は、男434名、女360名、出身地は関東(335名)と中部(189名)で約65%を占める。また東京都内に大学がある者は609名、76.8%である。

〈方法〉 老人のイメージは、10の形容詞対を尺度とするSD法により測定、一般的老人観については5つの質問項目に対する答えから分析した。分析に際して、性別・祖父母との同居経験など6要因を変数とし、どの要因と強い関わりがあるかを検討した。

〈結果〉 測定結果を総合すると、対象となった大学生は老人に対し「やや消極的で弱く頑固である反面、あたたかくて優しいというイメージ」を抱いている。対象者の属性の違いによるイメージでは、性別による有意差が最も顕著なものとして見られた。また老人問題への関心や老人と話す機会の有無は、イメージに強い影響を与えていた。老人観に関する質問の分析では、対象者の多くが老人に好意的であり、やはり関心と話す機会の有無が老人観を規定する要因として重要なものであることが明らかとなった。